

ICF：活動と参加の大分類チェックリスト

<活動>		<参加>
<input type="checkbox"/> a5	セルフケア※	
<input type="checkbox"/> a6	家庭生活	<input type="checkbox"/> p6
<input type="checkbox"/> a7	対人関係	<input type="checkbox"/> p7
<input type="checkbox"/> a8	教育・仕事・経済	<input type="checkbox"/> p8
<input type="checkbox"/> a9	社会生活・市民生活	<input type="checkbox"/> p9
<input type="checkbox"/> a3	コミュニケーション	
<input type="checkbox"/> a4	運動・移動	
<input type="checkbox"/> a1	学習と知識の応用	
<input type="checkbox"/> a2	一般的な課題と要求	
※	健康に注意すること	<input type="checkbox"/> p570

(問題のある項目の□にLを入れる)

※使用法：「生活機能とは何か－ICF：国際生活機能分類の理解と活用－」
(東大出版会) 参照

活動と参加の使い分け（中分類）：案（大川、上田、2008）

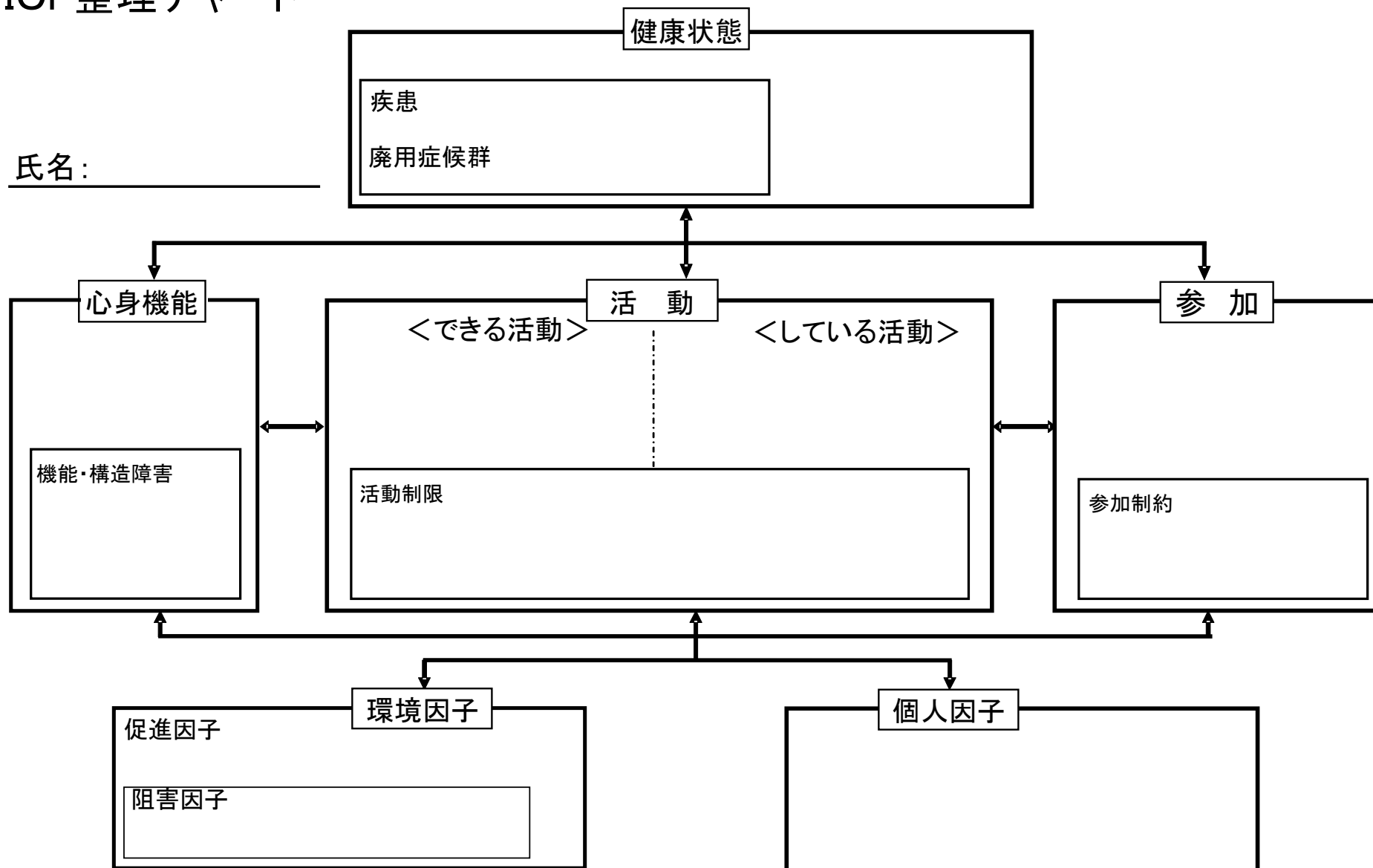
活動					参加				
	環境	実行 状況	能力			実行 状況	能力 (可能性)	環境	
			支援 なし	支援 あり					
5章 セルフケア					a510.	自分の身体を洗う			5章 セルフケア
					a520.	身体各部の手入れ			
					a530.	排泄			
					a540.	更衣			
					a550.	食べる			
					a560.	飲む			
					a570.	健康に注意する	p570		
				a571	<安全に注意すること>	p571			
6章 家庭生活	必需品の入手								6章 家庭生活
					a610.	住居の入手	p610.		
					a620.	物品とサービスの入手	p650.		
	家事								
					a630.	調理	へ 家庭 生活 参加		
					a640.	調理以外の家事			
	家庭用品の管理および他者への援助								
				a650.	家庭用品の管理	p660.			
				a660.	他者への援助				
7章 対人関係	一般的な対人関係								7章 対人関係
					a710.	基本的な対人関係			
					a720.	複雑な対人関係			
	特定の対人関係								
						よく知らない人との関係	p730.		
						公的な関係	p740.		
						非公式な社会的関係	p750.		
					家族関係	p760.			
					親密な関係	p770.			
8章 主要な生活領域 (教育・仕事・経済)	教育								8章 主要な生活領域 (教育・仕事・経済)
					a810.	非公式な教育	p810.		
					a815.	就学前教育	p815.		
					a816.	<就学前教育時の生活や課外活動>	p816.		
					a820.	学校教育	p820.		
					a825.	職業訓練	p825.		
					a830.	高等教育	p830.		
					a835.	<学校教育時の生活や課外活動>	p835.		
	仕事と雇用								
						見習研修(職業準備)	p840.		
					a845.	仕事の獲得・維持・終了			
						報酬を伴う仕事	p850.		
						無報酬の仕事	p855.		
	経済生活								
						基本的な経済的取引	p860.		
					複雑な経済的取引	p865.			
					経済的自給	p870.			
					<遊びにたずさわる>	p880.			
9章 コミュニティ 生活・市民生活	コミュニティライフ								9章 コミュニティ 生活・市民生活
					a920.	レクリエーションとレジャー	p920.		
					a930.	宗教とスピリチュアリティ	p930.		
						人権	p940.		
					a950.	政治活動と市民権	p950.		

* <イタリック>で示したものはICF-CYで新たに加わった項目。

3章 コミュニケーション	コミュニケーションの理解					
			a310.	話し言葉の理解		
			a315.	非言語的メッセージの理解		
			a320.	手話によるメッセージの理解		
			a325.	書き言葉によるメッセージの理解		
	コミュニケーションの表出					
			a330.	話す		
			a331.	<言語以前の発語(喃語)>		
			a332.	<歌うこと>		
			a335.	非言語的メッセージの表出		
			a340.	手話によるメッセージの表出		
			a345.	書き言葉によるメッセージの表出		
	会話並びにコミュニケーション用具および技法の利用					
			a350.	会話		
			a355.	ディスカッション		
		a360.	コミュニケーション用具および技法の利用			
4章 運動・移動	姿勢の変換と保持					
			a410.	基本的な姿勢の変換		
			a415.	姿勢の保持		
			a420.	乗り移り(移乗)		
	物の運搬・移動・操作					
			a430.	持ち上げることと運ぶこと		
			a435.	下肢で物を動かす		
			a440.	細かな手の使用		
			a445.	手と腕の使用		
			a446.	<細かな足の使用>		
	歩行と移動					
			a450.	歩行		
			a455.	移動		
			a460.	さまざまな場所での移動		
			a465.	用具を用いての移動		
交通機関や手段を利用した移動						
		a470.	交通機関や手段の利用			
		a475.	運転や操作			
1章 学習と知識の応用	目的をもった感覚的経験					
			a110.	注意して視る		
			a115.	注意して聞く		
			a120.	その他の目的のある感覚		
	基礎的学習					
			a130.	模倣		
			a131.	<物品を扱うことを通しての学習>		
			a132.	<情報の獲得>		
			a133.	<言葉の習得>		
			a134.	<付加的言語の習得>		
			a135.	反復		
			a137.	<概念の習得>		
			a140.	読むことの学習		
			a145.	書くことの学習		
			a150.	計算の学習		
			a155.	技能の習得		
	知識の応用					
			a160.	注意を集中する		
			a161.	<注意を向けること>		
			a163.	思考		
			a166.	読む		
			a170.	書く		
			a172.	計算		
			a175.	問題解決		
			a177.	意思決定		
2章 課題と要求			a210.	単一課題の遂行		
			a220.	複数課題の遂行		
			a230.	日課の実行(遂行)		
			a240.	ストレスとその他の心理的要求への対処		
			a250.	<自分の行動を管理すること>		

ICF整理チャート

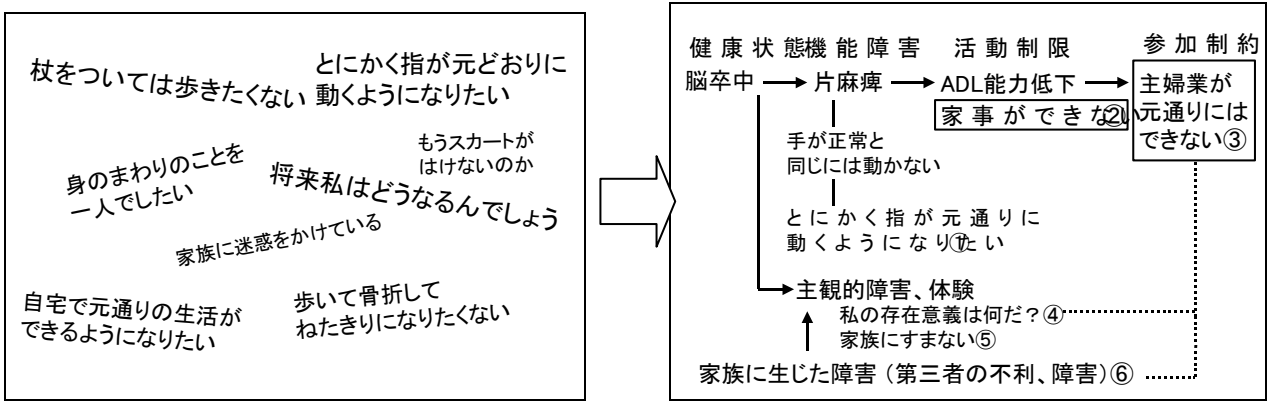
氏名: _____



※使用法: 「生活機能とは何か-ICF: 国際生活機能分類の理解と活用-」

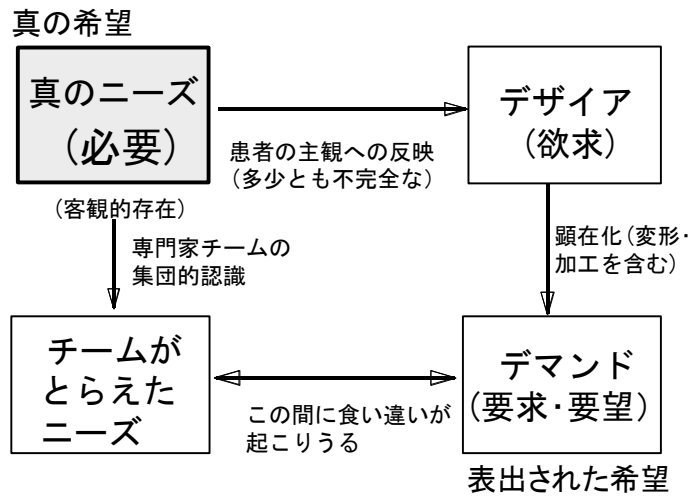
(東大出版会) 参照

真の希望を引き出す



新しいリハビリテーションー人間「復権」への挑戦ー講談社（現代新書） 第7章

参考：希望・ニーズ・デザイン・デマンドの関係



上田敏：リハビリテーションを考えるー障害者の全人間的復権。
青木書店、1983

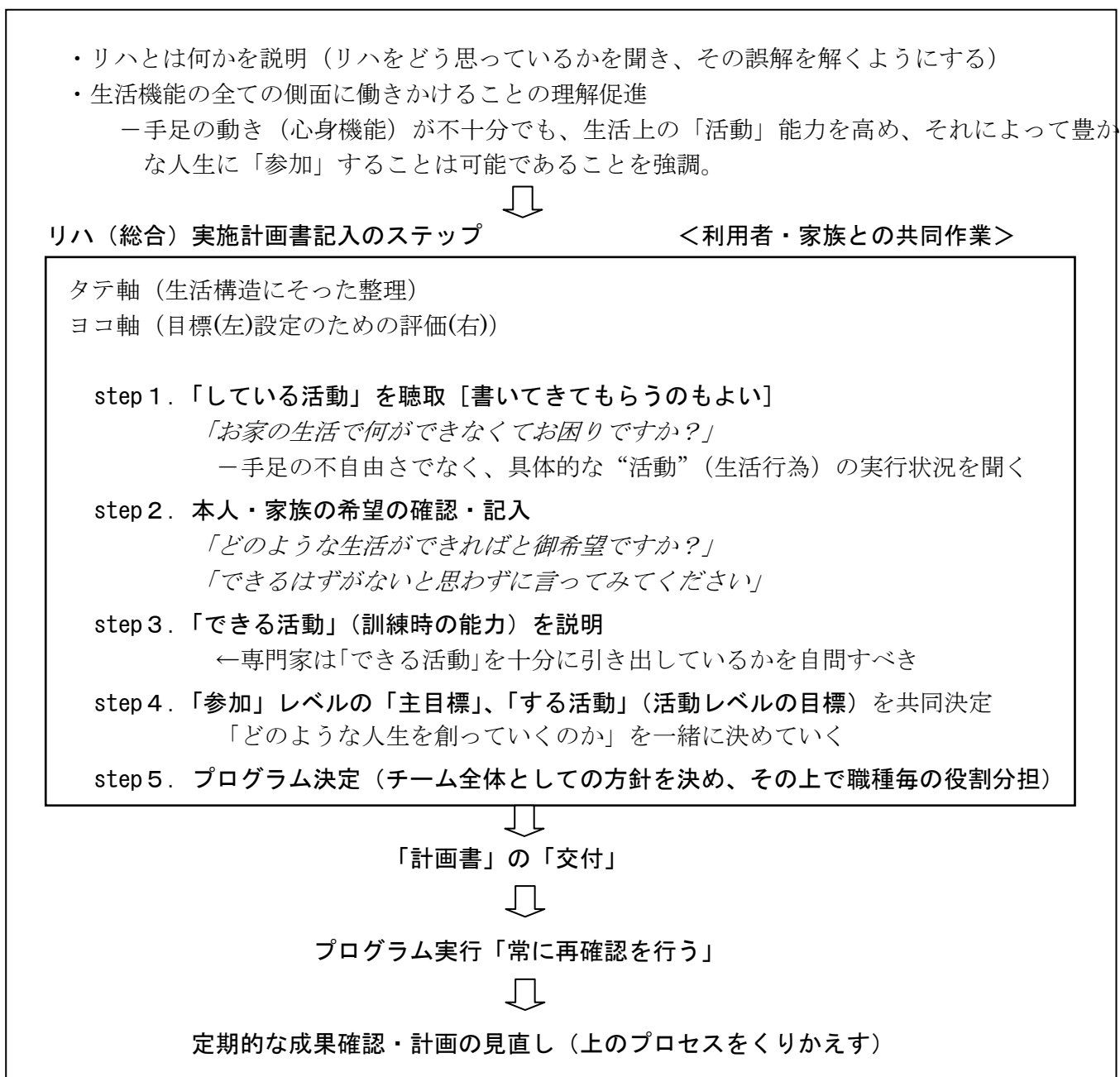
「リハビリテーション（総合）実施計画書」の記入と説明の手順

計画書の作製はリハ・チームにとっては真のチームワーク遂行の最初のプロセスであり、同時にチームと利用者・患者・家族などの当事者との共同作業の出発点である。その要点を下表に示す。

これを定期的にくり返すことで、当事者の自己決定権をチームの専門性で支えるという「車の両輪」がスムーズに進む。

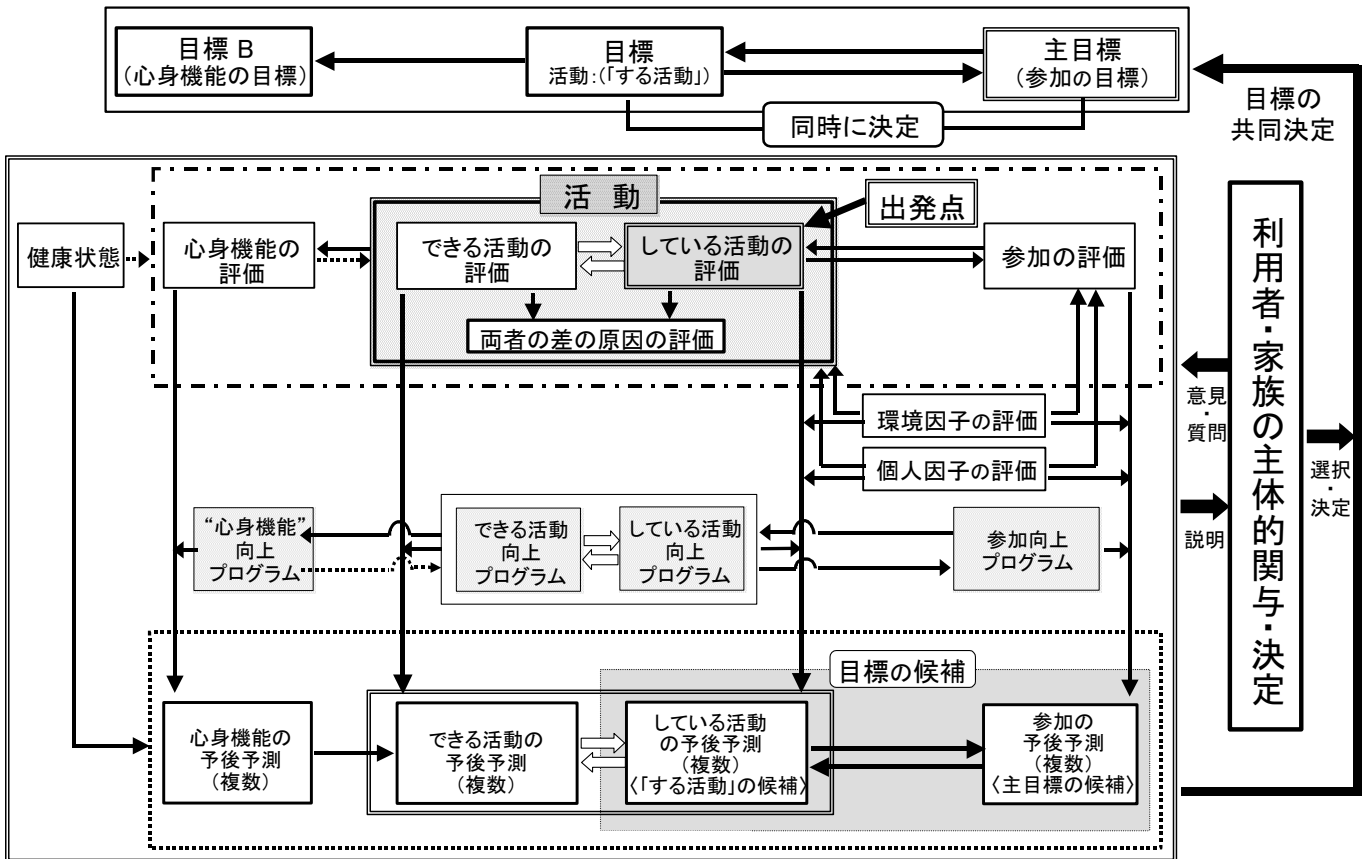
利用者・患者・家族などの当事者は疑問があれば遠慮せずに専門家へ相談すべきであり、誠実にそれに答えるのが専門家の責任である。

表. 計画書の記入と説明の手順



目標設定

目標指向的アプローチ



多数の専門職が関与し、それらがバラバラにではなく、その対象個人特有の目標を共有することが不可欠である。

そのために一人ひとりの利用者・患者について「どのような個別的・個性的な新しい人生を創るか」という問題意識に立って、社会的存在としての人間のあり方である参加レベルの「新しい人生」の目標（参加レベルの目標である“主目標”）とその具体的生活像である活動レベルの“目標（「する活動」）”を同時に決め、そしてそれを実現するために必要な心身機能・構造レベルの“目標”を決める。そしてそれらの相互関係を重視しつつ主目標の実現に向けてプログラムをつくり、すべての努力を集中させていくものである。

これらの目標設定のプロセスは図下の大きな枠内にあるように、各レベルにわたる評価の結果や、プログラムをもとにして、予後学（予後に関する知識・経験に立って評価結果、他のレベルの予後予測、提供できるプログラム等を総合判断して予後予測を行なう技術学）によって予後予測を行ない、その上で各患者にとって最良・最適の目標を決めていくのである。

その過程は専門家だけで進めるのではなく、その大枠と右の「本人・家族の主体的関与・決定」とが両方向の矢印で結ばれているように、本人・家族が主体的に関与して進められるべきものである。そして目標設定にも本人・家族が主体的に関与し、最終的には本人・家族が決定するのである。これは専門家が一方的に説明をして家族が単に同意するというものではなく、インフォームド・コオペレーション、すなわち真の協力関係の中での共同決定としてすすめることである。

なお各専門職がこのプロセスの中でどこに重点をおくかは、各職種・各個人の専門性によって異なってくるが、その際各職種は評価・プログラムともに自分が直接的に関与している生活機能レベルだけではなく、図に示しているように各生活機能レベルや様々な因子が相互に関連しあっていることを大前提として、それらを全体像として把握するようつとめなければならない。その上で、例えば理学療法士・作業療法士の直接的な働きかけの対象としては「できる活動」、看護・介護職は「している活動」を重視することが肝要である。

註 1) 参加の具体像としての活動：生活機能構造の視点からみた際重要なことは、参加の具体像が「している活動」であり、両者は不可分であるため、両者間が両方向の矢印で結ばれている。

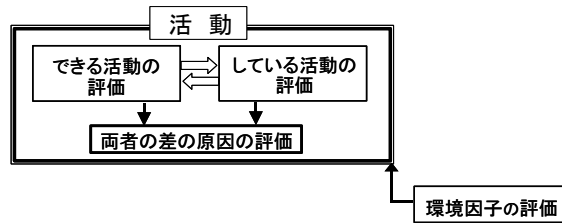
註 2) 「している活動」と「できる活動」：活動を「している活動」と「できる活動」とに明確に区別しているが、互いに緊密な関連性をもっているため、両者を同じ枠内において、その上で両者間を点線で分けている。

詳細は、大川弥生：介護保険サービスとリハビリテーション－ICFに立った自立支援の理念と技法－ 中央法規 2004

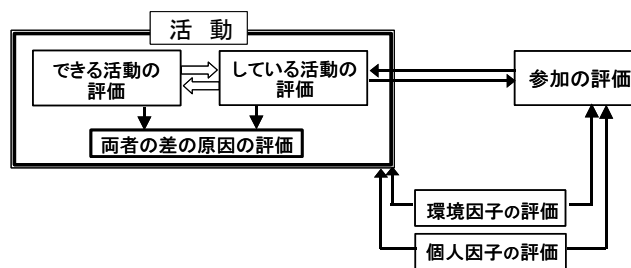
目標指向的アプローチにおける目標設定のプロセス

目標設定のステップ（１）：

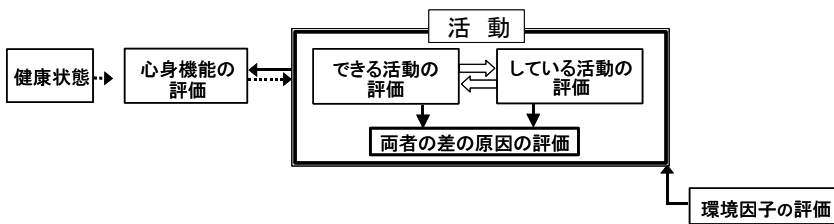
「できる活動」と「している活動」の評価と両者の差の原因の追求



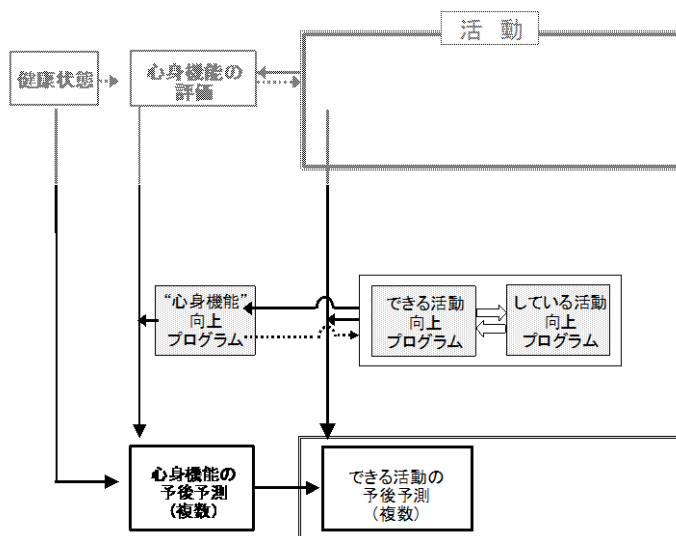
目標設定のステップ（２－１）：参加の評価－活動との関連で



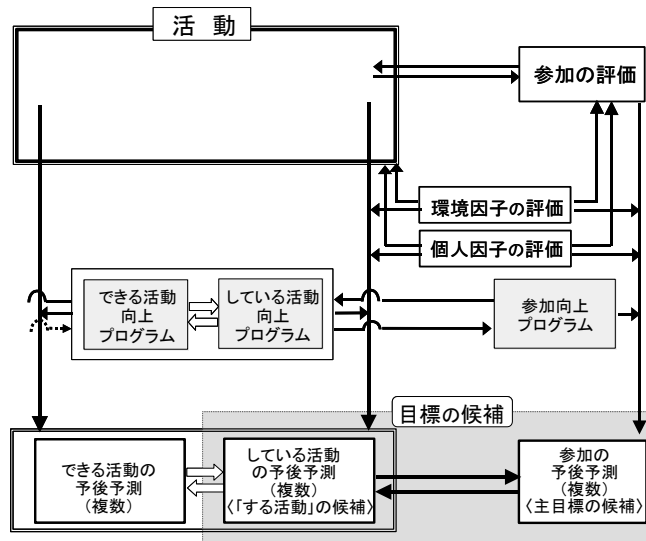
目標設定のステップ（２－２）：活動の評価と健康状態・心身機能の評価



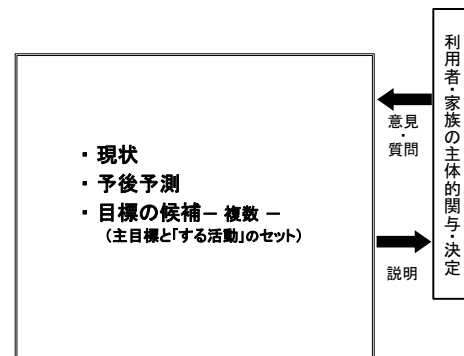
目標設定のステップ（３－１）：「できる活動」の予後予測（心身機能を考慮して）



目標設定のステップ（3-2）：「している活動」の予後予測



目標設定のステップ（4-1）



目標設定のステップ（4-2）

